

田畑に蛇口ができた日

水が無く満足に作物を作れない状況を一変

させたのが豊川用水の通水でした。豊川用水は水源に上流で降った雨水を貯留する宇連ダムと大島ダム、そして佐久間ダムを有し、農業用水や工業用水、水道用水として私たちに供給されています。幹線水路の総延長は約112km、そのうち、本市を流れる東部幹線水路は全長76kmに及びます。特徴は起点の大野頭首工（おおのとうしゅこう）（新城市）から終点の初立池まで電力を使用せず、高低差のみで流れていることです。当時の技術者の緻密な計算がうかがえます。

この用水の通水により、田畑一つ一つに水が行き渡るよう畑地かんがいが整備され、先端のバルブからは必要なときに必要な水が供給できるようになりました。

した。まさに田畑に蛇口ができたのです。

これにより、本市農業は大きな変貌を遂げ、ムギやサツマイモなどが主体の農業から、水を大量に必要とする温室での花きなどの施設園芸やキャベツなどの露地野菜が主体となつていきます。そして、通水以前100億円にも満たなかった本市（当時渥美郡）の農業産出額は、平成28年には約853億円となり、日本一を誇るまでになりました。



豊川用水実現のために奔走した郷土の偉人

近藤 寿市郎

《こんどう じゅいちろう》



◆ホラ吹きと呼ばれ

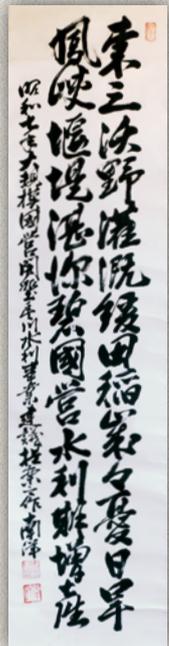
近藤寿市郎（明治3年～昭和35年）は現在の高松町出身の人物で、豊川用水構想の提唱者として知られています。近藤は愛知県議会議員、衆議院議員時代に一貫して豊川用水の実現に向けて活動を行っています。昭和7年に当時の帝国議会へ豊川用水の建設を含む議案を提出し、可決されます。このとき、豊川用水実現まであと一歩とせまりますが、日中戦争と太平洋戦争の開戦や財政問題により計画自体が立ち消えとなりました。しかし、戦後すぐ計画は見直され、豊川用水は建設されることとなりました。

近藤は常人では考えつかない壮大な構想をたびたび発表し、「ホラ吹き」「大風呂敷」とあだ名されました。しかし、近藤が提唱した構想は、現在の東三河の発展に無くしてはならない「豊橋港」や「豊川用水」として実現しています。

◆東南アジアにヒントを得た用水事業

近藤が豊川用水の構想を得たのは、大正10年、愛知県議会議員時代にインドネシアでの港湾工事、農業水利事業を視察したときだったといわれています。後に自伝である『今昔物語』には以下のように回想しています。「耕地の灌漑水利工事としても何千フィートある山の絶頂までスイッチ一つ押せば水が上がるということになっている。…（中略）…傾斜面の山腹は段を刻んで棚田をなし、ジャワの農耕は実に水利が長けていて至れりつくせりで、僕はこれを見て鳳来山山脈（えんてい）に堰堤を築き大貯水池を設け豊川に落とし渥美郡を始め東三河の灌漑用水を作るべきヒントを起こしたのである」

彼は帰国後、多くの方々の協力を得て、豊川用水の具体的な計画を作り上げていきました。そして、昭和43年、豊川用水は全面通水となりますが、近藤は通水の完成を見ることなく、完成の8年前の昭和35年、90歳の天寿をまっとうしました。



近藤寿市郎直筆の書（旧赤羽根町土地改良区所蔵）
「東三河の沃野はかんがいが細々とし、田の稲はたびたびの日照りに憂（うれ）している。鳳来の地に造られるダムに満々と水が湛えられ、国営水利事業により田畑の増産を期待している」との意味